

ワクチン導入学会訴え

年600人発症、5%が死亡

乳幼児が死に至ることもある細菌性髄膜炎を予防する「Hib(ヒブ)ワクチン」のわが国への導入が、大幅に遅れている。新薬の承認審査がなかなか進まないからだ。世界の先進国ではワクチン接種で髄膜炎が激減しているのに対し、わが国では毎年6000人の子どもが髄膜炎を発症し、死亡や後遺症に苦しむ家族が後を絶たない。日本外来小児科学会は26日、横浜市で開く春季集会でHibワクチンの必要性を訴える。

Hibは「インフルエンザウイルス」が正式名で、肺炎や敗血症など様々な感染症の原因となる細菌。冬に流行するインフルエンザのウイルスとは違う。わが国では、「細菌性髄膜炎」の約6割がHibによって引き起こされ、5歳未満の乳幼児2000人に1人が発症する。患者の5%が死亡、25%に後遺症が残る深刻な病気が。Hibワクチンは、1980年代後半からまず先進国で普及し、米国では導入後、髄膜炎の患者数が10分の1にまで激減した。98年には、世界保健機関(WHO)が定期予防接種を推奨、各国で導入が広がった。現在、開発途上国を含めた世界100か国以上で使われている。薬の承認すらされていない国は、先進国では日本だけだ。国内では、患者数の実態が明らかになった90年代後半以降、製薬会社が治験を開始、2003年3月にHibワクチンの新薬承認を国に申請した。しかし、3年が経過した今も承認されていない。新薬は通常、2年以内で承認されるのが多く、日本小児科学会は昨年6月、厚生省に早期承認を求め、要望書を提出したほどだ。理由については、審査業務を行う独立行政法人・医薬品医療機器総合機構は「個別の審査状況は、守秘義務があり答えられない」としているが、一部の小児科医は「機構の審査員の不足による手続きの遅れでは」とも推測している。

細菌性髄膜炎 脳や脊髄(せきずい)を覆っている膜に細菌が感染し、炎症を起す病気。化膿(かのう)性髄膜炎とも呼ばれる。頭痛や発熱、おう吐、ひきつ

けなどを起こし、悪化すると、発育の遅れや聴力障害などの後遺症が残ったり、死亡したりする。ウイルスによる無菌性髄膜炎よりも重症になることが多い。

26日の日本外来小児科学会での問題について講演する宮崎千明・福岡市立西部療育センター長は「後遺症に苦しむ患者を目にしている現場の小児科医としては、1日も早く承認してほしい」と話している。

髄膜炎から乳幼児守れ

「振り込まない」シンポ

詐欺被害都内急増 手口を紹介

昨年から今年にかけて東 さんが痴漢で逮捕された」とをして逮捕された」などと京都市内で「振り込み詐欺」 主婦をたます手口などが紹 偽って示談金を要求する「おまけ詐欺」や「おまけ詐欺」の被害が急増している。約4000人の参加



「金色夜叉」で日韓交流

筋書き似た韓国小説と比較

* 熱海市あすイベント

尾崎紅葉(1867~1903)の代表作「金色夜叉」と、筋書きの似た韓国小説「長恨夢」の両作品を比較しながら日韓交流を図るイベントを、静岡県熱海市が26日に開催する。市担当者は「100年前の両国の縁を多くの人に知ってほしい」と話している。

金色夜叉は、1897年 村濑教授(日本文学)は、から読売新聞に6年間連載 「長恨夢は、金色夜叉をアされ、全国から熱海に観光 レンジした作品」と説明す客が詰めかけるなど人気を 呼んだ。一方、長恨夢は作家趙重恒が1913年に 韓国の新聞小説などで公表。その後映画化されるなど人気を博し、今も高齢者層にはなじみ深い作品。 婚約相手を資産家に奪われた主人公が、復讐のために高利貸しになるという筋書きや、主人公が婚約者をけりつける名場面など、共通点が多い。法政大の川 伊イベントは熱海市のMOA美術館「能楽堂」を会場とし、高麗大の鄭光教授と川村教授が基調講演で両作品の比較論を解説。両作品を楽しんでもらうため、講師神田すみれさんによる講演「金色夜叉」と、韓国の語り部金基英さんによる長恨夢のあらすじ紹介も予定している。